

修士論文概要

大学生の友人関係に対する孤独感の肯定的側面からの考察
—本来感と自尊感情の対比を含めて—

蓮田 実香

1. 問題と目的

1980年代半ば以降、青年の友人関係の特徴として、関係が希薄化し、内面を開示し合うことを避け、互いに傷つけ合わないような気を遣った関わり方をするといった傾向が指摘されるようになった(小谷(1988)、岡田(1995)、佐山(1985))。本論では、1980年代半ば以降に指摘されているような特徴的な友人関係を取る中で、その側面として孤独感が位置づくだろうと考えた。そして落合(1983、1985)により、孤独感における健康的な側面が指摘されており、指摘されている孤独感に着目し、本論で取り上げた。落合(1983)は、健康的な孤独感について、“人間同士の理解・共感の可能性についての次元「LSO-U” “自己の個別性についての次元「LSO-E)”の2軸があるとしている。また落合は孤独感が自己実現として体験される過程を、これら「LSO-U」「LSO-E」の2軸から前者が高く後者が低い段階から、両者の低い段階を経て両者が共に高い段階に移行するとし、これらの移行段階を自己実現の低い段階から高い段階に対して4分類(A型、B型、C型、D型)した。

また、本論では、Well-being(幸福感)研究としての従属変数に対しても検討を進めた。Well-being(幸福感)研究他、健康的なパーソナリティの指標として、一般的に用いられる従属変数として「自尊感情」が挙げられ、その「自尊感情」に対して批判的に「本来感」という従属変数に対する研究も進められている。本論では、孤独感の様相を明確にするべく、これら「自尊感情」と「本来感」を従属変数として対比的に取り上げた。本論においては、統計での検討の際に孤独感への友人関

係の影響を勘案し、「自尊感情」と「本来感」の2つの従属変数を対比的に検討することとし、孤独感そのものの健康的な側面を明確にする一助となると考えられる。それら「自尊感情」「本来感」に対し、落合の孤独感への4分類による移行がどのように反映するのか、また、そこから青年期での孤独感の在り方としてどのような状況が指摘し得るかを検討する。

以上のように、「自尊感情」とは異なり「本来感」を従属変数とすることで、青年期ならではのWell-being(幸福感)の側面を明らかにすることを目的とした。

更に本論では、A5サイズの台紙に友人関係についてドットシールで被験者に理想の関係性を表現させるドットテストを実施した。ドットテストでは友人関係についての内的な表象を対象としており、「本来感」による内的な側面に着目することに沿っている。

2. 方法

関東私立大学において授業時間内に質問紙法による調査を実施。対象者は122名であり、記入漏れ等を除いた112名を分析対象とした。調査時期は2018年6月から11月のうち3回実施した。使用した質問尺度等は「本来感尺度」「自尊感情尺度」「友人関係尺度」「孤独感尺度」「ドットテスト」の5つを使用した。

3. 結果と考察

本論では、落合の提唱する孤独感の健康的側面を取り上げ、「本来感」「自尊感情」の対比の中で検討を行った。その結果、「本来感」の方が自己実現半ばと言える青年期での

孤独感の様相を指摘し得る結果となった。

「本来感」にとって人と親密な関係を持つとする志向性を持ちながら、それがなかなか実現しないこともある中で、どの様に向き合っていくかに関わっていると言えるだろう。

本論では友人関係に対して投影的な手法としてドットテストを実施し、クラスター分析を行った。その結果、「対称性・全面分布クラスター(クラスターⅠ)」、「非対称性・全面分布クラスター(クラスターⅡ)」、「非対称性・中央分布クラスター(クラスターⅢ)」という3つのクラスターが認定された。そして、「本来感」においてのみ、「非対称性・中央分布クラスター(クラスターⅢ)」のタイプが多いことが分かった。このドットテストの結果は落合が指摘する孤独感4分類の中で自己実現が最も低いA型に有意であると考えられる。「本来感」が「自尊感情」に比して従属変数として青年期の孤独感の様相を明確にしていた。

そして本論では、同じ幸福感の従属変数である「自尊感情」と「本来感」であるが「友人関係尺度」と「孤独感尺度」からの影響で異なった結果を示していた。「本来感」では仲間関係として気遣いが無く仲間に入っていける側面が幸福感となっており、「自尊感情」では気遣いをせず更に仲間に入っていくというものが背景としてあることが分かり、「本来感」の方が孤独感の肯定的側面との関連を指摘し得ているだろうということも分かった。

4.主要引用文献

- 小谷敏(1998). 若者たちの変貌-世代をめぐる社会学的物語-. 世界思想社
- 落合良行(1983). 孤独感の類型判別尺度(LSO)の作成. 教育心理学, 31,332-336.
- 落合良行(1985). 青年期における孤独感を中心とした生活感情の関連構造. 教育

心理学研究, 33,70-75.

岡田努(1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察. 教育心理学, 43,354-363.

佐山薫子(1985). 友達つきあい 東京都青少年問題調査報告書 大都市青少年の人間関係に関する調査—対人関係の希薄化の問題との関連から見た分析—生活文化局 pp.48-53.